

日本学生サッカー前史： 四高外国人教師デハビランドとヴォールファルトのフットボール

大久保英哲

Hideaki Okubo: The prehistory of Japanese student soccer: The football played by two foreign professors at the former Fourth High School, Kanazawa. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 58: 331-342, June, 2013

Abstract : It is said that the history of Association Football in Japan, especially student soccer, began when an Englishman named DeHavilland moved from the Fourth High School in Kanazawa to the Tokyo Higher Normal School in September 1904, where he started coaching soccer. It has been recorded in the history of the Tokyo Higher Normal School soccer club that “some students of the University in Tokyo who said they had been taught football in Kanazawa came to Otsuka with their teacher, and we played a practice match together in December, 1904”.

This article suggests that DeHavilland had also taught soccer in Kanazawa. However, in the history of the Fourth High School soccer club, it is stated that “soccer began in Kanazawa in 1924”, and does not mention DeHavilland. On the basis of this evidence, the history of soccer in Japan states that “this may have not been the case, because of the short stay of DeHavilland and lack of any proof that soccer was played in Kanazawa”.

Accordingly, the purpose of the present study was to obtain documentary evidence of DeHavilland and to clarify whether he did, in fact, play soccer in Kanazawa during 1898-1904, based on new documents from the Fourth High School and articles in the school union magazine at that time.

The findings obtained were as follows:

1. DeHavilland urged students to play football after he started working at the Fourth High School in 1898. His words at the kick-off, which marked the start of student soccer in Japan, were: “It is no matter, hailing, snowing, raining. Come and play!”
2. It is stated in Hokushinkai magazine that DeHavilland was involved in establishing a football club in 1898. Mention of the football club appeared in the Fourth High School Union rulebook in 1899, and the name DeHavilland appeared in the list of board members of the football club in 1901.
3. On April 18th, 1901, football was played for 30 minutes at the Fourth High School as one of the sports at the sports festival.
4. On October 5th, 1902, at the ceremony to mark the opening of the “football club” at Ishikawa prefectural Second Junior High School, DeHavilland and Wohlfarth both played goalkeeper.

This evidence of the involvement of DeHavilland and Wohlfarth in soccer at the Fourth High School and in Kanazawa should be regarded as one of the hidden roots of student soccer in Japan.

Key words : Japanese student soccer history, the former Fourth High School, DeHavilland, Wohlfarth
キーワード : 日本学生サッカー史, 第四高等学校, デハビランド, ヴォールファルト

問題の所在

日本学生サッカー史では、1904(明治37)年9月にイギリス人デハビランド^(註1)が金沢の第四高等学校(以下「四高」と略す)から東京高等師範学校へ転動して、サッカーを指導したことを以て「組織的なサッカーの始まり」とするのが通説となっている。(日本体育協会、1958、1987;日本体育学会体育史専門分科会、1967;日本蹴球協会編、1974、pp. 39-40;東京教育大学サッカー部、1974、p. 54;柴田、2003;北海道サッカー協会、2009、p. 59など)。

すなわち、東京高等師範学校のそれまでのフットボール活動や、1903年『アソシエーションフットボール』を刊行するなどの同部のサッカー研究が、デハビランドの着任後、実践的な指導を受けて本格的なサッカーに発展し、やがて積極的・組織的な対外試合を展開するに至った。さらに、部員が広島高等師範学校や埼玉師範学校などへ指導に出かけたり、卒業生が教員となって全国の師範学校や中学校に赴任していったことで、全国に学生サッカーが普及していった(大熊ほか、2005) ことを見れば、日本学生サッカー史に東京高等師範学校が果たした役割の大きさが窺われ、その契機となったデハビランドのサッカー指導を以て、日本学生サッカー史上「組織的なサッカーの始まり」とすることも歴史的評価として首肯されることである。

さて、デハビランドが赴任した東京高等師範学校は「(1904年:筆者)12月10日に、金沢でデハビランドの指導でフットボールを練習したという大学生数名がやって来て、一緒に練習試合をした」旨の「校友会誌」第6号(1905年2月)の記事を残しており、デハビランドは金沢でも教えていたのではないかと推測もされていた(東京教育大学サッカー部、1974、p. 55)。しかしながら、四高蹴球部自身が「北国の地金沢の四高にウィンタースポーツの最たる蹴球がはじめられたのは大正十三年、同好の士が三々五々と集まりボールを蹴って楽しんでいったことからはじまっ

た」(作道・江藤、1972、p. 567)と記述するのみで、デハビランドについては全く触れていない。このこともあって、日本サッカー史は「デハビランドの在任が短かったことと、金沢という土地にはまだ蹴球の素地がなかったことのために、四高の蹴球部史では全くこれを知らなかったのではないだろうか」(日本蹴球協会編、1974、p. 39)との記述に至っている。

そこで、本研究ではデハビランドの人物史研究という立場から、四高在職時の公文書類や校友会誌などの記録をもとにデハビランド関係資料を発掘するとともに、四高におけるサッカー活動や、さらには同僚のドイツ人教師ヴォールファルトと共に近隣の中学校に出かけてサッカーをしていたことなど、従来知られていなかった史実を明らかにする。またヴォールファルトはこれまで日本学生サッカー史では全く取り上げられたことがないため、その履歴や足跡についてもやや詳しく検討する。

なお日本学生サッカー史では、これまで代表的な東京高等師範学校や地方の強豪校であった神戸の御影師範学校あるいは神戸中学校などのサッカー活動が注目されてきた。しかし本稿で明らかにしたように、強豪校ではない各地方の旧制高等学校にもスポーツに堪能な外国人教師がいてサッカーを指導している例が見られるのである。すなわち、サッカーはもとより日本におけるスポーツ史の黎明期研究にこうした地方からの見直しという新たな視点を提供する点に本研究の意義が認められる。

1. デハビランドの先行研究

デハビランドの研究では、「予本校(東京高等師範学校:筆者)に来るに及んで初めて日本に於ける理想的フットボールを見たり」との発言や週2回熱心に部員を指導したこと、1905年1月28日にデハビランドが自ら東京高等師範学校チームのメンバーとなって、横浜の外国人チームと対戦したことなどを紹介している(東京教育大学サッカー部、1974、pp. 55-56)。また日本蹴球協会

編 (1974, p. 23) にはこれらに加えて東京高等師範学校時代の人物写真が掲げられている。また柴田 (2003), 北海道サッカー協会 (2009, pp. 60-64) の研究は, デハビランドが1893年から1896年まで3年間函館に滞在し, 地元青少年たちとフットボールをした形跡があることを含め, その経歴と生涯をほぼ明らかにしている。東京生まれのデハビランドの長女オリビア・メアリー (Olivia Mary de Havilland) (1916-現在) と次女ジョン・デ・ボーボアール (Joan de Beauvoir de

Havilland, 舞台名 Joan Fontaine) (1917-現在) の2人の娘が1930-40年代にハリウッドのアカデミー賞女優として有名になり, 次女の伝記 (Joan Fontaine, 1978) に父親の生涯が語られているからである。また1910年に横浜のケリー & ウォルシュ社 (Kelly & Walsh, Ltd) から The ABC of Go: The national War-game of Japan (碁のABC: 日本を代表する遊戯) を出版し, その著者としても関心がもたれ, 上記自伝を引用する形で紹介されている (Steven J.C. Mays, 1999)。

表1 デハビランド略年譜*

1872(明治5)年	8月31日出生 チャールズ・リチャード・デハビランドの10人の子供の末子として, ケントのレウィッシュハムに生まれ, チャネル諸島のガーンジーで育った。
1893(明治26)年	21歳 ケンブリッジ・オックスフォード大学競艇定期戦に優勝, ケンブリッジ・オールを受賞。同年ケンブリッジ大学卒業, M.A学位を取得。船便にて, 実兄ジョージ・メイトランド・デハビランドのいた日本に向かい, 横浜に着くとすぐに北海道(函館)に行き, 日本聖公会函館ヨハネ教会の主教ウォルター・アンドリュース師の元に寄留し, 子弟に対する英語の個人教授をした。スポーツ万能選手で, 子弟らに谷地頭のグラウンドや函館公園広場で, クリケットやフットボールを指導した。
1896(明治29)年	24歳 函館から聖公会系の神戸にある乾行義塾へ転任。乾行義塾は英国から派遣された聖公会司祭ヒュー・ジェームズ・フォスが1878(明治11)年に作ったキリスト教精神に基づく男子校であった。
1898(明治31)年	26歳 金沢の第四高等学校英語教師就任(4月)。
1904(明治37)年	32歳 東京高等師範学校教員に就任(9月)。生徒にアソシエーション式フットボールを指導し, 第四高等学校の卒業生や横浜の外人チームと試合をし, 自らも選手として出場した記録が校友会誌に記載されている。日本国内のサッカー史では, これが日本におけるFA式フットボールの起源とされている。
1905(明治38)年	33歳 Short stories for composition and conversation を三省堂から出版 (Walter Augustus de Havilland, 1905)。
1906(明治39)年	34歳 東京高等師範学校を辞し, 東京麹町に特許事務所を開設した。
1910(明治43)年	38歳 The ABC of GO (碁のABC) を横浜の Kelly & Walsh 社から出版。
1914(大正3)年	42歳 11月30日 リリアン(28歳)とニューヨークで結婚。
1916(大正5)年	44歳 7月1日 東京で長女オリビア・メアリー誕生。
1917(大正6)年	45歳 10月22日 東京で次女ジョン・デ・ボーボアール誕生。
1919(大正8)年	47歳 2月 一家がイタリアに向かう途中カルフォルニアのロスアンジェルズで離婚, デハビランドは日本に帰国。リリアンは2人の娘と共にアメリカに残った。
1927(昭和2)年	55歳 ヨキ(Yoki)と再婚。
1932(昭和7)年	60歳 次女ジョン(15歳)来日, 東京・横浜で父デハビランド・継母ヨキと生活した。
1934(昭和9)年	62歳 次女ジョン(16歳)父と不仲になり, アメリカに帰国。その後, 16年間父と会わず。
1940(昭和15)年ないし1941(昭和16)年	68歳ないし69歳 太平洋戦争が始まる前にヨキとともにアメリカに移住。戦後さらにカナダに移住した。
1941(昭和16)年	69歳 次女ジョン, ヒッチコック監督の「断崖」でアカデミー賞受賞。
1949(昭和24)年	77歳 長女オリビア, 「女相続人」でアカデミー賞受賞。
1950(昭和25)年	78歳 次女ジョン(32歳)と16年ぶりに再会。
1958(昭和33)年	86歳 妻ヨキ死亡。
1960(昭和35)年	88歳 3番目の妻ローズ・メアリーと結婚
1968(昭和43)年	96歳 カナダ・バンクーバーの近郊で死去。

(*北海道サッカー協会 (2009, p. 64), Steven J.C. Mays (1999) をもとに筆者作成)

北海道サッカー協会（2009, p. 64）ほかをもとに作成したデハビランドの略年譜を見ておこう（表1参照）。

生年は1872年、イギリス・ケント地方（Kent）のレウィッシュハム（Lewisham）に生まれている。1893年（21歳）ケンブリッジ大学で神学を学ぶ。在学中競艇に優勝し、同年卒業後、兄ジョージ・メイトランド・デハビランド（George Meitland de Havilland）のいる日本へやってきて、函館で英語の個人教授をしたあと、3年後の1896年（24歳）に神戸にある乾行義塾^{けんこう}の教員となった。2年後の1898年（26歳）に四高の教員に採用され、6年間勤めた後、1904年（32歳）東京高等師範学校に移って、そこでのサッカー指導が日本における「組織的なサッカーの始まり」として今日に知られている。その後、1906年（34歳）退職、東京麹町に特許事務所を開き、1914（大正3）年（42歳）に英国人女性リリアン・フォンティーン（Lilyarn Fontaine）と結婚した。1916年長女オリビア、1917年次女ジョンが誕生したが、1919ないし1920年離婚。娘たちは母とカリフォルニアへ渡り、以後ハリウッド女優の道を歩んだ。その後デハビランドは、昭和初期に東京駅前に特許事務所を開き、1927（昭和2）年（55歳）日本人女性ヨキ（Yoki）と再婚した。1940ないし1941年、太平洋戦争が始まる前に戦雲を避けて離日し、アメリカに移住。1968年カナダ・バンクーバー近郊で96歳の生涯を終えた。

2. 四高に残されている デハビランド関係資料

(1) 履歴書

金沢大学資料館には四高「外国教師履歴書 第一輯」が保管されており、その中にデハビランド採用に当たって提出されたと思われる履歴書（日本語）がある。

デハビランド 履歴書

履歴

ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランド

W. A. de Havilland.

一 英国臣民

一 千八百七十一年九月英国ニ於テ出生

一 ケムブリッジ大学卒業「バチエロル、オフ、アーツ」ノ学位ヲ受ク（B.A.）

一 目下神戸ニ於テ教育に従事ス

ここには生年が1871年9月と記述されており、1872年8月という北海道サッカー協会（2009, p. 64）の説とは異なっている。

(2) 自筆書簡

第四高等学校「明治三十四年十二月止 外国教師ニ關スル件 甲號書類 庶務掛」（以下「外国教師ニ關スル件」と略す）（金沢大学資料館所蔵）には、採用に関するデハビランドの自筆書簡が残されている。邦訳（筆者による）を示す。

H.J. フォス師 気付

神戸 樫の館

1898年4月2日

拝啓

貴校で募集しておられる英語教師の職の諸条件が、私に合致していることを知って喜んでおります。

私は英国人で、日本において4年以上の教員経験があります。

目下のところ、私は外国人学生の担当教員ですが、我が校にはおよそ70名の日本人学生も在籍しております。私の学位は、ケンブリッジ大学の文学士で、そのほかにいくつかの副専攻試験にも合格しています。年齢は今度の8月で26歳になります。健康状態は申し分ありません。

現在の職場には大変満足しています。もしここを離れるとなれば、半年前に通知をいただきたいと思えます。私の後任者をイギリスで見つけなければなりませんので、もし私を採用いただけるのであれば、できるだけ早急に契約を結んでいただきたいのです。俸給は月に250ドル、そのほかに住居手当として10ドルと理解しています。3年以上の雇用期間が保証されない場合は、残念ながらお引き受けしかねます。

ご希望であれば、ラテン語、ギリシャ語、フランス語などの授業もいたします。私についての人物証明書（推薦書）の写しを同封いたします。原本については契約時にご確認ください。

もしすでに別の方の採用が決まっているのであれば、書類はご返送くださいますようお願いいたします。

四高（1898）「第二〇四号 教師雇入ニ付伺ノ件 六月七日発議」（「外国教師ニ關スル件」）によれば、デハビランドは先任のダニエル・アル・マッケンジーが1898年7月31日で嘱託満期を迎えるため、その後任として採用される予定であったが、デハビランドの手紙によって、この人事が4月2日にはほぼ確定していたことがわかる。

またこの手紙にはデハビランドが四高英語教師としての採用を歓迎していること、日本で既に4年間教育に従事し、神戸で外国人子弟に教育をするとともに70人の日本人学生を指導していること、健康であること、ケンブリッジ大学の卒業であること、月俸250円、宿料10円と理解していること、最低3年以上の雇用を希望しており、それ以下であれば雇用を希望しないこと、要請があればラテン語、ギリシャ語、フランス語も指導可能であること、などが述べられている。

このなかで、いくつかの興味深い事実をあげよう。神戸の乾行義塾は英国から派遣された聖公会司祭ヒュー・ジェームズ・フォス（Hugh James Foss）（1848-1932）が1878年に作ったキリスト教精神に基づく男子校であった。現在神戸にある松蔭女子学院はこのフォスらの働きによって1892年に創設された同系列の女学校であるが、1898年当時の乾行義塾の学校実態についてはよく知られていない（松蔭女子学園校史編纂委員会，1992，pp. 18-25）。『松蔭女子学院百年史』にもデハビランドが教員をしていた記述は見られない。手紙記述であるが、乾行義塾には外国人子弟のほかに70人の日本人学生がいたこと、デハビランドの後任はイギリスから見つける予定であることなど、教員や生徒の情報を知ることができる。また、フォスは1888年神戸四宮神社に隣接

する下山手通5丁目（現在中山手通5丁目）に邸宅を構え、それに“The Firs”「樅の館」と名付けていたといわれる（松蔭女子学園校史編纂委員会，1992，p. 8）が、差出住所からデハビランドがフォス邸に居住していたことを知ることができる。またデハビランドは乾行義塾の職場に満足しており、四高が3年以下の雇用であれば引き受けないこと、給料は250円と考えていることを述べている。後述するように、デハビランドの契約書（草案）を見ると最初の給料は225円であり、雇用期間は翌年3月までの7か月余りでしかなかった。

また、年齢は今度の8月で26歳になると書いていることから逆算すれば、生年は北海道サッカー協会（2009，p. 64）の通り1872年8月であり、履歴書の1871年9月は誤りであろうと考えられる。

(3) 契約書（草案）

デハビランドの1898年最初の契約書（邦文草案）を示す。

外国人教師との一般的な契約草案であるが、当初11条からなる草案が9条にまとめられるなど、整備の過程を知ることができる。なお、消し線は原本では朱書きによる修正である。

契約書（案）

第一方第四高等学校校長北条時敬ト第二方英国臣民ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドト取結フ契約左ノ如シ

第一条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドヲ第四高等学校教師トシテ明治三十一年八月十一日（千八百九十八年八月十一日）ヨリ明治三十二年三月三十一日（千八百九十九年三月三十一日）マテ七箇月ト二十一日間雇傭ス

第二条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドノ給料ハ雇傭ノ期間中全一箇月金貳百貳百貳十五円ト定メ毎月末日ニ之ヲ支給ス 一箇月未滿ノ執業日数ニ対シテハ日割ヲ以テ之ヲ支給ス

第三条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルラン

ドハ英語学及英文学ノ授業ヲ担任ス 学校第一方ニ於テ必要ヲ認ムル時ハ佛語及羅匈語ノ授業モ担任ス

第四条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドハ第四高等学校ノ諸規則ヲ遵守スルハ勿論 授業時間割等総テ第一方ノ指揮ニ従フヘシ
ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドノ 授業時間数ハ一週二十四時ヲ超過セシメス

第五条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドハ第四高等学校ノ諸規則ニ於テ定ムル所ノ休業日ノ外休業スヘカラス

第六条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドハ学校ノ利害ニ関シ意見アル時ハ第一方ニ申立ルコトヲ得一其取捨決定ノ権ハ第一方ニ属ス

第七五条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドノ雇傭ノ期間満了ノ後尚引続キ雇傭セントスルトキハ其期間満了六十日前に其事ヲ協議スヘシ

第六六条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドノ雇傭ノ期間中ト雖モ止ムヲ得サル事由アルトキハ第一方ニ於テ此契約ヲ解除スルコトアルヘシ 前項ノ場合ニ於テハ解約ノ翌日より起算シ二箇月分ノ給料ヲ支給ス 若シ雇傭ノ期間満了ノ前二箇月未滿ナルトキハ期間満了マテノ給料ヲ支給ス 但第九七条及第十八条ニ依ル規定スル契約解除ノ場合ニ於テハ此限ニ在ラス

第九七条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドニ於テ契約ノ解除ヲ希望スルトキハ六十日前ニ第一方ニ之ヲ請求スヘシ

第十八条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランド疾病其他事故等ニ依リ業ヲ廃休業スルコトニ週日ニ及フノ後ハ其休業ノ間第一方ニ於テ給料ヲ半減スルコトアルヘシ 若シ休業ノ当初ヨリ二箇月ニ及フモ尚其業ヲ執ルコト能ハサルトキハ第一方ニ於テ此契約ヲ解除スルコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドハ第一方ニ於テ適当ト認ムル者ヲシテ代リテ業ヲ執ラシムルトキハ約定ノ給料

ヲ支給ス

第十一九条 ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランドニ宿料トシテ雇傭ノ期間中全一箇月金拾円ヲ毎月末日ニ支給ス 一箇月未滿ノ日数ニ対シテハ日割ヲ以テ之ヲ支給ス

明治三十一年 月 日(千八百九十八年 月 日)記名

第四高等学校長 北条時敬

ダブリュ、エー、ド、ハヴキルランド

この草案が成案に移行したとすれば、最初の契約期間は1898年8月11日から翌年3月31日まで7か月余りである(第1条)。ただし結果的には7月31日までの契約更新が行われ、以後1ないし2年間の契約更新が4度なされている。最初の給与は月俸200円が225円へと修正(第2条)された跡があるが、デハビランドの書簡にある希望額の250円ではない。すなわち、デハビランドと四高の折衷案として225円が設定された可能性がある。ちなみに昇給は1899年の1回目の契約更新時に250円、1903年の4回目の契約更新時に300円と2回行われている。契約書(第3条)には英語学・英文学の授業担当(学校が必要とする時にフランス語、ラテン語の授業も担当)も明記されているので、先に示したデハビランドの書簡を踏まえたものとみられる。1904年7月31日に「満期ニ付解傭」(「外国教師履歴書」となり、この後東京高等師範学校に異動した。なお、1901年、デハビランドの父が死亡し、9月23日付で、「家事整理ノ為本年十二月末迄ニ帰校ノ予定ヲ以テ帰国申出」がなされ、「契約第八条第二項ニ依リ英国人イー・スナッドグラスヲ代人」とする伺い記録が残されている(「明治三十四年九月二十三日発議「外国教師代人ニ関スル申報ノ件」(「外国教師ニ關スル件」)。

3. 四高におけるデハビランドのフットボール

(1) フットボール部の創設と指導

1898年初冬、デハビランドはフットボール部を創設して、生徒たちにサッカーをやるぞと呼び

かけていたことが、「北辰会雑誌」21号（1898年12月22日）「雑報・豪気堂々」に収録されている。「豪気堂々」に取り上げられているのは、中俣教授の病気快癒、四高の実弾射撃演習、磯田講師の陸軍大演習参加とフットボールの記事である。「ウットボール」となっているのは、聞こえた音をそのまま文字にしたからであろうと思われる。以下に現代文として示す^{註2)}。

○ウットボール

北風が激しく吹き付ける。草は枯れ葉は落ち、学校の風景は冬そのものだ。ぼさぼさ頭の学生たちは皆室内の火ばちの傍に寄り集まっている。その時に何事か校庭から大声で叫ぶ声が聞こえてきた。これは、デハビランド先生が創設したフットボールクラブからの声である。先生はケムブリッジ大学でチャンピオンになった人であった。先生はいつも言っていた。It is no matter, hailing, snowing, raining. Come and play! (雨が降ろうが、雪が降ろうが、あられが降ろうが、問題はない。さあここに来て一緒にプレーしよう! : 筆者訳) と、元気なことだ。

四高（第四高等中学校）に学友会「北辰会」が設立されたのは、1892年のことであり、設立当初から運動部として撃剣部、弓術部、ベースボール部、陸上運動部、遠足部、相撲部と並んで「フットボール部」が置かれた（金沢大学五十年史編纂委員会，2001，p. 94）。また1895年、1897年にも北辰会の中に「フットボール会」の名を見ることが出来る。1897年には運動部の活動が盛んになり、委員会を開いて活動の日割を定めているが、ベースボール部が水・土、ロンテニス「天気次第」であるのに対し、「フットボール部」は金曜日だけであった（「北辰会雑誌」17号，1897年12月13日）。したがって四高「フットボール部」は決してデハビランドが初めて創部したわけではなかったのだが、1週間に1日程度であれば、この当時この学校でもそうであったように、「只、わいわい、騒ぎ回って居る位」（東京教育大学サッカー部，1974，p. 42）で、チームを作って組織的にゲームを行うという形式ではな

かったであろうと考えられる。したがって、デハビランドが1898年に「フットボール部」を創設したというのは、それが事実であるとすれば、それまで生徒たちが目にしてきたものとは異なったフットボールすなわちサッカーを行う部が作られたということの意味するのではないかと思われる。この1898年の「北辰会雑誌」には、「フットボール部」が創設されたとの記録は残念ながら見当たらないが、翌年1899年の四高校友会規則には「フットボール部」が確認でき（「北辰会雑誌」25号，1899年12月15日）、また1901年の校友会役員「フットボール部」に部長・田部隆次（英文学）と並んでデハビランドの名前があり（「北辰会雑誌」30号，1901年11月2日）、1898年に四高フットボール部に対するデハビランドの積極的な関与があったことはほぼ間違いないと見られる。もし、デハビランドが率先してプレーし、その指導を受けたとすれば、四高「フットボール部」は当時としては英国式の本格的なサッカーを行っていたものと考えられる。四高から東京の大学に進学した部員が師を慕って東京高等師範学校がある大塚まで来て一緒にサッカーの練習試合をしたというすでに述べた記述はこの推測を裏付ける。ちなみに、「北辰会雑誌」26号（1900年3月5日）によれば、同年度の校友会予算として、ベースボール32円、ロンテニス38円、「フットボール」20円が計上されており、フットボール部の活動が予算面からも確認できる。

デハビランドがいつも言っていたという「雨が降ろうが、雪が降ろうが、あられが降ろうが、問題はない。さあここに来て一緒にプレーしよう!」という掛け声は日本学生サッカーのキックオフを告げる言葉であったのである。

しかしながら、1904年にデハビランドが去った2年後の四高「フットボール部」は「言うに足りない」（「北辰会雑誌」44号，1906年6月21日、「北辰会各部管見」と酷評されるほどに停滞し、デハビランドの痕跡は見られなくなってしまった。デハビランドのフットボール指導が定着するには至らなかったのである、

(2) 1901(明治34)年4月18日運動会でのフットボール

次にデハビランド着任以後に四高で行われたフットボールの記録を見ておこう。最初の記録は1901年4月18日の創立記念運動会での「フットボール」(「北辰会雑誌」30号, 1901年11月2日)である。

○フットボール

午前九時より同九時半に至る 大球飛んで清空に聲あり, 落下亂れて地上に音無し, 激戦數十分, 勝は二部に歸せり

四高には一部(法科・文科志望者), 二部(工科・理科・農科志望者)及び三部(医科志望者)が置かれており(金沢大学五十年史編纂委員会, 2001, pp. 107-108), 運動会の種目の1つとして部対抗で試合が行われたものとみられる。またこのフットボールはデハビランド着任後3年目であることから, フットボール部をはじめとして指導していたサッカーと考えてよいのではないかと思われる。四高においてフットボール部以外の生徒たちの間にも行われていたことを示す貴重な記録である。

(3) 石川県立第二中学校足球部発会式: デハビランドとヴォルフアルトのフットボール

デハビランドが着任して5年目, 1902年10月5日, デハビランドは四高から1 kmほど離れた石川県立第二中学校(以下「第二中学校」と略す)に出かけ, サッカー部と思われる「足球部」発会式でゴールキーパーを行った記録が, 第二中学校校友会「会誌」第2号(1903年4月20日)に収録されている。現代文として示す。

山では紅葉が錦を張り, 町では酒を暖めて, 雅客を待ち, 秋の風が枯野を渡り, 肥馬が声高いななく季節となった。新鮮な空気を肺に満たそうと願う我ら二中生が, どうしてこの絶好の季節を見過ごすことがあろう。そこで10月5日を選んで, 足球部発会式を本校運動場にて挙行した。

午後2時開会のベルと共に第1回目の「戦争」が開かれた。紅白の両軍が入り乱れて互

に鎬を削る戦いが20数分続き, ついに引分となった。

第2回目の「戦争」も同じように20数分続き, また引分となった。

第3回目の「戦争」は10数分続いたが, 白軍は残念ながら紅軍に敗れた。

第4・5・6回目の「戦争」ではデハビランド, ウォルフアルトの2人の先生が互に分れて両軍のゴールキーパーとなり, 激しい「戦争」が行われた。互いに1勝1敗のまま, 遂に日没となり, 戦いは終了した。

「足球部」とあり, ゴールキーパーも置かれていることから, これはサッカーと見てよいであろう。四高のスポーツ活動は近隣の下級諸学校にとってモデル的效果や情報提供の役割を果たしていた(大久保, 1998)とされ, デハビランドが指導したフットボール部が影響を与えて近隣の第二中学校「足球部発会式」に至ったと考えれば, デハビランドがその発会式に出席ないし招待されたというのは十分に理解されることである。

「戦争」とは「ピリオド」のことであろうから, 20分くらいずつ6回試合をしたこと。後半の4・5・6ピリオドではデハビランドと「ウォルフアルト」という人物がゴールキーパーとなり, 白熱したサッカーの試合が行われた状況を知ることができる。

(4) スポーツマンとしてのデハビランド

「北辰会雑誌」21号(1898年12月22日)には, デハビランドが四高の陸上大運動会で旗取競争, 四丁競走, 二人三脚競走に賞品を提供したり, 職員二丁競争に出場して圧勝したり, 臨時競技として宣教師ノルマン氏と自転車の3周競争を行ったり, ドイツ語の中目覚教授との綱引きに応じたり, 大活躍している様子が記録されている。また同じく「北辰会雑誌」25号(1899年12月15日)に「ON UNIVERSITY ROWING」というエッセイを書いて, ケンブリッジのボート活動の意義やボートの構造, 練習法なども紹介している。また次女の伝記の中で「なかなかのテニスプレーヤーであった」とも言われ, ケンブリッジでの活

動は未確認であるが、フットボールやボートをはじめさまざまなスポーツに堪能な英国的スポーツマンであり、東京大学予備門のストレンジ（1854-1889）をほうふつさせる人物である。

4. ヴォールファルトとフットボール

(1) ヴォールファルト

第二中学校「足球部発会式」でデハビランドと共にゴールキーパーをした「ウォルフアルト」とは1902年1月1日から1921年7月31日まで20年間ドイツ語を教えた四高のドイツ語教師エルンスト・ヴォールファルト（Ernst Wohlfarth）^{注3)}のことである。日本サッカー史にはこれまで全く知られていない。

1873年11月16日ドイツで生まれており、デハビランドより1歳年下である。日本で初めての本格的和独辞典（小田切良太郎、エルンスト・ヴォールファルト編纂『新譯註解和獨辞典』富山房、1912）を著している。この辞書は明治年間における和独辞書の集大成として大好評を博し、昭和9年で42版を数えるほど広く普及したという。1909年11月2日、日本におけるドイツ語教育の功績が評価され、勲五等授雙光旭日章を受けた。こうした関係で、ヴォールファルトは編者小田切良太郎と共に日独史研究で取り上げられる著名な人物であり、四高の関係資料等もほぼ研究対象に取り上げられて今日に至っている（上村、2009）。

四高「外国教師履歴書 第一輯」にはヴォールファルトの履歴書が残されている。Ernst Wohlfarth、ドイツ人、1873年11月16日ロイス（Reuß）国ロープシュタイン（Lobstein 附近）のティールバッハ（Thierbach）で出生。ブラウエン（Plauen）の師範学校で6年学んだ後、1894年グラウヒャウ（Glauchau）の助教師、1896年検定試験に合格して本教師となり、翌1897年にはドレスデン（Dresden）体操教師検定試験に合格した。1899年9月22日以降、ライプツィヒ（Leipzig）の教師となり、ライプツィヒ大学で講義を聴講したという旨の記述がある。すなわち、

師範学校を出た教師であるが、1897年に体操教師検定試験に合格していることが注目される。丸山（2006）、上村（2009, p. 28）によれば、後に辞書を一緒に編纂した小田切良太郎がライプツィヒ大学に留学していた縁で知り合い、来日に結びついたとみられる。

(2) ヴォールファルトのフットボール経験

さて日本サッカー史上初めてのドイツ人先駆者となるヴォールファルトはどの程度のフットボール経験があったのであろうか。ヴォールファルトは1880年代の終わりのころから90年代にかけて、ブラウエン、グラウヒャウで師範教育ないし教師検定試験を受け、1897年にはドレスデンで体操教師検定試験に合格し、ライプツィヒで教師をしていた。

ドイツの体操科が制度化される19世紀半ば以後の体操教師検定試験の制度や内容を明らかにした成田（1991）の研究によれば、体操教師の実技試験内容は、基本的に徒手体操、平行棒・跳馬・鞍馬運動、鉄棒運動、登攀運動、剣術などのドイツの体操が主であり、フットボールなどのスポーツは全く入っていない。

しかし成田（2011, pp. 39-40）によれば、1890年代にドイツ各地の中でもライプツィヒはもっともフットボールが盛んな地域であった、1882年の夏には、数人の体育教師たちが…フランクフルト門芝生でシュラクバルを行い、1895年1月1日から年末までのライプツィヒ体育会（普通体育会遊戯団）の活動ではフスバル（フットボール：筆者）が最も盛んに行われていたという。

つまり、1880年代の終わりのころから90年代にかけてドイツで師範教育を受け、体操科試験検定に合格したヴォールファルトが体操科の試験や正規の教育の中でフットボールを行っていた可能性は低いが、ライプツィヒの体操教師会の一員であったとすれば、サッカーのルールやプレーについて知識を有し、プレーをしていた可能性は高い。だが、この点の解明は今後に待たねばならない。仮にヴォールファルトがサッカーをやったことが

なかったとしても、後述するように、優れた身体運動能力とデハビランドの手本やアドバイスを受けて、互いにゴールキーパーを競ったと考えれば、前に述べた第二中学校足球部発会式のサッカーは本格的な試合であった可能性が高い。また、今日に至る日独サッカー交流史の大きな流れから見ると、ヴォールファルトはドイツ人としてその最初に位置付けられる人物である。

(3) ツルナーとしてのヴォールファルト

ヴォールファルトは1902年第二中学校運動会に出向いて、来賓スプーン競走で入賞したり、徒歩旅行の効用を説いたり（「北辰会雑誌」32号，1902年6月23日），第1回鉄脚隊遠足に参加したり（「北辰会雑誌」36号，1903年12月24日），「山登りが得意らしく，日本アルプスなどという言葉

が出来ぬ前にあの辺の山に登っているという自慢したこともあった」（上村，2009，p. 42）と言われている。また1902年の第10回四高秋季陸上運動会の職員競走では，3位のデハビランドを抑えて1位になっている（「北辰会雑誌」34号，1903年4月17日）。すなわち身体運動能力に優れ，トゥルネンや歩・走運動，登山などいかにもドイツ的な体育に秀でた人物であったと考えられるが，1902年にデハビランドとともにゴールキーパーをやった以外には，今のところフットボールを行った記録は見出すことができない。デハビランドとヴォールファルトの間にはスポーツとトゥルネンをめぐる論争もあったのではないかとみられるが，この点については今後の課題である。なお，デハビランドとヴォールファルトが並んで写った写真を示す。



写真1 デハビランド（左）とヴォールファルト（右）（下から2列目中央）1903年（四高「外国教師二關スル件」）

結 論

1. 「北辰会雑誌」には、デハビランドが四高に着任した1898年、フットボール部を創設、指導した旨の記述が見られる。こうした経験はその後東京高等師範学校での指導に生かされたものと考えられる。一方、デハビランドが転任した後の四高フットボール部はすぐ低迷状態に陥った。したがってデハビランドの四高ないし金沢でのサッカー指導は、東京高等師範学校に直接結びついたサッカー指導の先駆けではあったが、日本学生サッカーに及ぼした影響から見れば、「組織的サッカーの始まり」に至る前史として位置付けるのが適切であろう。また1898(明治31)年に生徒たちにフットボールをしようと呼び掛けた「雨が降ろうが、雪が降ろうが、あられが降ろうが、問題はない。さあここに来て一緒にプレーしよう！」は日本学生サッカー史上記念すべきキックオフの言葉である。

2. 1902年10月5日、石川県立第二中学校「足球部」発会式を兼ねたゲームの中で、デハビランドとヴォールファルトの両者はゴールキーパーを務めている。この「足球」は、おそらく四高のフットボールがモデルとなったサッカーであると考えられる。

3. 日本サッカーの「草創期(時代)」(日本蹴球協会編, 1974, p. 29)には、1896年神戸尋常中学校「蹴鞠会」(神中サッカー・クラブ, 1966)、御影師範学校「ア式蹴球」(御影蹴球団, 1967)など、地方における学生サッカーの先駆的で多様な実施形跡が見出される。本研究で取り上げた四高の外国人教師によるフットボールもその1つであり、これまで知られていなかった隠れたルーツの1つである。また全国の旧制高等学校には英語やドイツ語を教える外国人教師が配置されており、彼らの中にはデハビランドやヴォールファルトのように、フットボールやそれ以外のスポーツへ関った者もいたのではないかと思われる。そのような地方史の立場から日本におけるスポーツの導入や普及を再点検することは今後

の課題であろう。

謝辞

本研究に際し、日本サッカーミュージアム津内香氏ならびに金沢大学資料館には史料閲覧・提供など格別のご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

注

注1) ウォルター・アウグスタス・デハビランドは、Walter Augustus de Havilland が正式表記と見られ、Havilland, DeHavilland, deHavilland とも表記されている。また日本語表記もデハビランド、デ・ハビランド、デハビルランド、ハビランドなどが見られる。本稿では日本語表記ではデハビランドを、英語表記(省略形)には DeHavilland を用いた。

注2) 志村(1990)によって見出されたこの資料は、日本学生サッカーにとって史料的価値が高いと思われるため、以下に原文を示す。

○ウットボール

北風凜烈、草枯れ葉落ち満校の風光悽愴たり、人は皆蓬頭を窓裡火邊に集むるの時、何事ぞ後庭喊叫の聲、是なんデハビルランド師乃創設に係るフウトボール倶楽部にぞある、師は是ケムブリッチに於ける當年のチャンピオン、常に曰く、It is no matter, hailing, snowing, ^(マツ)rainig. Come and play! と壮哉

注3) エルンスト・ヴォールファルトは、Ernst Wohlfarth が正式表記である。ヴォールファルト、ウォルフアルト、ウォルフアルなどの日本語表記が見られるが、引用以外の本文ではヴォールファルトを用いた。

文 献

- 第四高等学校「明治三十四年十二月止 外國教師二關スル件 甲號書類 庶務掛」(金沢大学資料館)。
 第四高等学校「外國教師履歴書 第一輯」(金沢大学資料館)。
 第四高等学校北辰会(1897)「北辰会雑誌」17号, 論説, 高橋亭, 辰章校々風乃現在及び過去を新來生諸君に望む, 明治30年12月13日, pp. 14-15。
 第四高等学校北辰会(1898)「北辰会雑誌」21号, 雜報, 豪氣堂々, ウットボール, 明治31年12月22日, p. 76。

- 第四高等学校北辰会(1898)「北辰会雑誌」21号, 雑報, 陸上運動会記事, 明治31年12月22日, pp. 98-109.
- 第四高等学校北辰会(1899)「北辰会雑誌」25号, 雑報, 第四高等学校校友会規則, 明治32年12月15日, p. 89.
- 第四高等学校北辰会(1899)「北辰会雑誌」25号, 雑報, DeHavilland, ON UNIVERSITY ROWING, 明治32年12月15日, pp. 28-30.
- 第四高等学校北辰会(1900)「北辰会雑誌」26号, 雑報, 校友会費予算, 明治33年3月5日, p. 113.
- 第四高等学校北辰会(1901)「北辰会雑誌」30号, 雑報, 校友会々員(特別会員), 明治34年11月2日, p. 99.
- 第四高等学校北辰会(1901)「北辰会雑誌」30号, 雑報, 記念日運動会, 明治34年11月2日, p. 117.
- 第四高等学校北辰会(1902)「北辰会雑誌」32号, 雑報, 独逸学部報告, 明治35年6月23日, p. 84.
- 第四高等学校北辰会(1903)「北辰会雑誌」34号, 雑報, 明治三十五年拾回秋季陸上大運動会附天長節祝賀会, 明治36年4月17日, p. 166.
- 第四高等学校北辰会(1903)「北辰会雑誌」36号, 寮報, 第一回鉄脚隊遠足記事, 明治36年12月24日, pp. 148-149.
- 第四高等学校北辰会(1906)「北辰会雑誌」44号, 雑報, 川合生, 北辰会各部管見, 明治39年6月21日, p. 71.
- 北海道サッカー協会(2009)北海道サッカー協会創立八十周年記念誌, 北海道のサッカー, 北海道サッカー協会:札幌.
- 石川県立第二中学校校友会(1903)足球部発会式, 「会誌」2号, 明治36年4月20日, p. 146.
- 神中サッカー・クラブ(1966)ボールを蹴って50年: 神中クラブ50年史, p. 17.
- Joan Fontaine(1978) No Bed of Roses, William Morrow & Company, Inc.: New York.
- 上村直己(2009)新訳註解和独辞典編者小田切良太郎・ヴォールフェルト, 日本独学史学会, 日独文化交流史研究, pp. 17-46.
- 金沢大学五十年史編纂委員会(2001)金沢大学五十年史 通史編, 金沢大学創立50周年記念事業後援会: 金沢.
- 丸山珪一(2006)四高のドイツ人教師ヴォールフェルトと中野重治, 金沢大学資料館だより, 第27号.
- 御影蹴球団(1967)兵庫県御影師範学校蹴球部回顧録, 御影蹴球団本部: 神戸, p. 5.
- 成田十次郎(1991)近代ドイツスポーツ史II, 社会・学校体操制度の成立, 不昧堂: 東京, pp. 547-560.
- 成田十次郎(2011)サッカーの伝播と受容・展開を考える: ドイツの場合, 日本体育学会体育史専門分科会, 体育史研究, 28, pp. 35-43.
- 日本蹴球協会編(1974)日本サッカーのあゆみ, 講談社: 東京.
- 日本体育学会体育史専門分科会編(1967)日本スポーツ百年の歩み, ベースボール・マガジン社: 東京, p. 216.
- 日本体育協会編(1958)スポーツ八十年史, 日本体育協会: 東京, p. 191.
- 日本体育協会監(1987)最新スポーツ大事典, 大修館書店: 東京, p. 375.
- 大熊廣明・阿部生雄・真田 久・岡出美則・長谷川悦示(2005)高等師範学校・東京高等師範学校による学校体育の近代化とスポーツの普及に関する研究, 筑波大学体育科学系紀要, 28, p. 166.
- 大久保英哲(1998)石川の体育・スポーツの歩み, 石川県体育協会(編)石川県体育協会創立50周年記念誌: 大地揺るがす感動・スポーツ石川のあゆみ, 石川県体育協会: 金沢, pp. 104-105.
- 作道好男・江藤武人(1972)北の都に秋たけて, 財界評論新社: 東京, p. 567.
- 柴田 勲(2003)黎明期・北海道のフットボールの胎動: 伝道師役を果たした2人のデ・ハビランドの謎, 札幌大学文化学部紀要, 比較文化論叢, 12, pp. 1-24.
- 志村信幸(1990)デ・ハビランドの四高時代におけるサッカー活動について, 金沢大学教育学部卒業論文.
- Steven J.C. Mays(1999) Who was Walter de Havilland? (<http://pages.infinit.net/steven/abcofgo.htm>, 2012. 3.6 取得)
- 松陰女子学園校史編纂委員会(1992)松陰女子学院百年史, 松陰女子学園: 神戸.
- 東京教育大学サッカー部(1974)東京教育大学サッカー部史, 恒文社: 東京.
- Walter Augustus de Havilland(1905) Short Stories for Composition and Conversation with Notes and Appendix, Sanseido: Tokyo.

(平成24年7月2日受付)
(平成24年11月19日受理)